

論文

植民地と故郷 ——清岡卓行、三木卓、後藤明生（後半2）

佐藤 亨

キーワード

三木卓
後藤明生
植民地
引き揚げ
故郷
異邦のふるさと

目次

- 3. 『方丈記』と団地
 - 3-1 三木卓と『方丈記』
 - 3-2 後藤明生の小説世界と団地
 - 3-2-1 「とつぜん」という副詞
 - 3-2-2 「到着」と「漂着」
 - 3-3 綾瀬川と龍興江
- 引用・参考文献

3. 『方丈記』と団地

三木卓と後藤明生は住居にこだわりのない。たとえば、三木はつぎのように言う——「ぼくは後年、できあいの安マンションを月賦で買って暮すことになるが、それがいちばん現実的で経済的で身のほどに合っていると思っていたからである。ぼくは自分の好みの土地を買って、自分の好みの建築家に家を設計してもらい、それにいろいろ注文をつけながら自分にふさわしい家を建てる、などということにあこがれるどころか、恐怖を感じる。そんなことをしたら、いくら金がかかるかわからない」（『私の方丈記』、107-8）。

いっぽう、後藤の住まいは郊外の公営団地である。しかも23度目の抽選でやっと入手した——「わたしはいまの団地に住みはじめてからちょうど満十年になるが、この関東平野のど真中に出現したコンクリート造りのにわか街の周辺を、まったく何の取柄もないものとして見捨てて来た。『奥の細道』の芭蕉が前途三千里の思いを込めて、最初に草鞋を脱いだ草加宿であると知っても、別段つまらなさに変りはなかった。どういうものか籤運が悪く、はずれにはずれて二十三度目ようやく当たった団地であったが、要するに自分が選んだ住み場所ではない。自分が求めた場所ではなかった。したがって自分はこの地に、到着したのではない。あらかじめ目ざした場所に到着したのではなくて、考えても見なかったところへ漂着したのに過ぎない」（『思い川』、『思い川』、169）。

三木の住まいは「できあいの安マンション」であり、後藤の住まいは「関東平野のど真中に出現したコンクリート造りのにわか街」、つまり、マンモス団地（草加市の松原団地）である。二人とも住まいはつましい。三木が「身のほどに合っている」というように、二人の住居への意識の根底には、自身が経験した大陸や朝鮮半島での生活、その後の引き揚げがあるようだ。

また、後藤の一節に「漂着した」という語があるように、二人の人生は歴史や時代に翻弄されてきた。いわば、流されてきた。日本の植民地で少年時代を過ごし、敗戦により、そこをあとにせざるをえなかった。しかも、二人は引き揚げを前にしてともに父を失う。

偶然ではあるが、戦中、戦後を生きた二人が人生を語る際に仮託するのは川である。三木の一節は『私の方丈記』からの引用であり、後藤の一節は『思い川』からの引用である。「ゆく河の流れは絶えずして、しかも、もとの水にあらず」——いずれの作家も川を機縁にして、過去を回想する。同時に、現在を語る。川は時間の比喩である。歴史だけでなく人生の比喩でもある。

3-1 三木卓と『方丈記』

「生まれては死んでいく人間は、どこからきたのか。そしてどこへむかって去るのか。それは、わたしにはわからないことだ。そういう人間にとって家などは、みじかい生のあいだ

を過ごす、ほんのしばらくの居場所にすぎない。／そのことを人々はわきまえているだろうか。たとえば、いざ家を建てるとなると、人はひどく神経をすりへらし、できあがるとあかずにがめて楽しむ。それはだれのため、なんのためか。これもまた、わたしにはわからないことである」(『私の方丈記』、13)。

三木卓は『私の方丈記』として、鴨長明が1212年ごろに書いた随筆『方丈記』を現代語に訳し、エッセイを添えている。いまあげた一節はその翻訳の一部であり、原文は「不知、生れ死ぬる人、何方より来たりて、何方へか去る。また不知、仮の宿り、誰が爲にか心を悩まし、何によりてか目を喜ばしむる」である。上の一節でもわかるように、三木の翻訳はていねいでわかりやすい。

三木卓は『方丈記』に強い思い入れがある——「鴨長明(かもの・ながあきら)は、九百年ほど前に京都に生きていた。かれは川の流れの考察からはじまる『方丈記』という老年の心境を語るエッセイを書いたことで、今なお大いに愛読者を持ち、入学試験にも出題されたりしているが、ほくもまた、かれの書いた『方丈記』が、ひどく好きである。まるで、ほくのために書いてくれたような親近感を抱いている。もちろんずいぶん違う人生であったような気もするのだけれども、その気持はちっとも矛盾しない」(同上、53)。

「ひどく好き」とか、「まるで、ほくのために書いてくれたような」と、作品への愛着ぶりを語るが、それほどに『方丈記』は三木にとって身近であり、また、着想を得るテキストである。『方丈記』が「川の流れの考察からはじまる」とすれば、三木卓のエッセイは『方丈記』の考察から始まる。この古典が三木に人生を回想させ、人生観を語らせる。彼にとって『方丈記』そのものが、川の流れのごときものだ。

三木は作品と自分のあいだを行き来する。三木卓という翻訳者は、知らぬ間に原作者鴨長明になり、それから三木卓という作家となるのである。その理由はいくつか考えられる。ひとつに、三木が老齢に入り、「老年の心境を語る」鴨長明に深く共感を抱いていること、また、三木は自分の住む小さなアパートを、鴨長明が老年に移り住んだ庵(方丈)に当たると親近感を抱いていることなどである。「人間にとって家などはみじかい生のあいだを過ごす、ほんのしばらくの居場所にすぎない」、したがって、家は広くなくていいのである、と。

「方丈」とは一丈四方の部屋という意味であり、一丈とは約3メートルである。長明自身が説明している部分を三木訳で挙げる——「こんどの住まいは、世のふつうの家とはちがっている。部屋は、一丈四方、つまり約三メートル四方というつつましい広さで、高さは二メートルほどである。(訳者注——一丈四方を略して「方丈」、この随筆の題『方丈記』は、この庵で書いたという意味である。)」(34-35)。このように三木は翻訳に注まで付けている。

この庵は鴨長明が60歳を機に作ったものである。「こんどの住まいは、人生の中ごろを過ごした鴨川べりの家にくらべると、さらに百分の一もない、小さなものである。年はどんど

んとり、住まいはどんどんせまくなったということだ」(34)と本人が言うように、住まいはつつましく、死を覚悟して移った終の棲家ともいえるだろう。

三木は翻訳しながら、自在にみずからを語る。彼の人生の原点は大陸での生活であり、引き揚げである。そして、父を亡くしたことが彼の人生を決定した。彼が住居への欲求が低いのもそうした事情がある——「今のぼくには高級ブランドの製品に対する欲求はない。そういうものは、自分のような卑小なものが使うのにふさわしくないからだ。自分は、引揚者の、生活保護をうけている母子家庭の子である。欲望は育ついとまもなくつぶされてしまった」(108-9)。

三木にとって戦中と戦後の経験が、いかに彼の生活スタイル、おおきく言うと人生観に影響を与えたかがわかる。興味深いのは三木の現在のなかに中国大陆での過去が生々しく息づいていることである——「今、ここにぼくがいる、こうして存在しているということがフシギでしかたがない。ぼくは、ほんとうに神奈川県鎌倉市の小さなアパートのうすぐらい一室で、パソコンを叩いている。これは、今やかなり肉体的にも精神的にもイカれているけれども、六十年前に中国長春の中国人たちの市場の雑踏のなかで、強大なソ連兵の掠奪をおそれながら、タバコを売っていた子ネズミのような少年のなれのはてである」(52)。

まるで三木が座っているアパートを一歩出ると、戦時中の中国大陆が外に広がっているかのようである。現在の日本と戦時下の中国が交叉しているのである。しかし、現実には、戦争から長い時間が経過し、彼は現代の日本に生活をしている——「今は、酔っぱらって寝ころぶ余地もないビル林立の東京である。その東京でぼくはときに仕事をしてから、車でレインボーブリッジをわたって、鎌倉へもどっていく。そういうときなど、今の自分の存在は現実なのだろうか、としばしば怪しみいぶかる。少年時代の雑誌に出ていた、高速道路のはりめぐらされた巨大未来都市の想像図。ぼくは今そのなかを通過している。あれから六十年」(94)。

「六十年前に」、あるいは、「あれから六十年」。彼のなかには常に60年前がある。60年前の自分が現在の自分のうちに居続けている。彼が引き揚げたのは小学生の時であるが、現在の彼のなかには依然、その小学生がいるのである。戦中を大陸で過ごし、戦地から日本に引き揚げた小学生、それは三木にとって永遠の少年である。

『砲撃のあとで』の最後に置かれた作品「朝」には引き揚げ船にいいよ乗る場面が描かれる。語り手の少年の家族は、戦後すぐに父を失い、祖父母、母、兄、そして少年の5人で引き揚げ、その途中で祖母を失い、なんとか船が出る港にたどりつく。これから荷物検査が始まり、少年は順番を待っている。そのなかの一節である——「足元にはみな、口紐を弛めたりリュックサックを置いていた。少年も小型で灰色の袋の口をひらいて中が見えるようにした。こどもじみたものなどまるで入っていない。シャツとズボン下と毛布。スリッパ。父親

の骨。家族の写真。箸とアルミニュームの椀。まがった匙。罐切り。若干の穀物。果物ナイフ。本。弁当箱に詰めた野蒜の球根。移植鋤。鍋。石けん。父親の骨と本を除外すれば、あとは生きるために必要なものばかりだ。この袋を背負ってここまでやって来た。死は青白くて細い手を伸ばして、いくどもおれの首根っ子をつかもうとした。しかしどうやらなんとか逃れられそうな様子だ。危いところだったが、その手は喰わないぞ。あんたらは、こんなにおれのまわりにいたやつを殺したんだ。もういいだろ。見逃してくれ」(225)。

目の前のリュックサックに向かって、「この袋を背負ってここまでやって来た」と感慨を洩らし、多くの者の命を奪った死にたいして、「もういいだろ。見逃してくれ」と懇願する。ここで死は「あんたら」と複数形でしめされ、しかも擬人化されるが、それほど死が身近なできごとだったことがわかる。

この少年は戦争を生き延びた。そして、のちに詩人となり、小説家となった。また『方丈記』の翻訳者となった。あらためていうまでもなく、三木は詩人、小説家になったから自身の引き揚げ経験を書いたのではなく、そうした経験が三木を詩人、小説家にした。それと同様、その経験ゆえに三木卓は『方丈記』に共感し、翻訳した。

3-2 後藤明生の小説世界と団地

「母よ、許されよ。わたしにはわたしの狭い小さな世界があって、そこでしかわたしは生きられないのです！ わたしはそこで何ごとかをとつぜん思い出したり、またとつぜん忘れていたりしながら生きているのです！」(「一通の長い母親の手紙」、『思い川』、177)。

この一節は、短いながら、後藤明生の小説世界を凝縮していると思われる。ここにある「狭い小さな世界」、「とつぜん」という副詞、そして、「狭い小さな世界」という語から想起される団地は、後藤の小説の特徴を表す。

まず、「とつぜん」という副詞についてであるが、この短い一節のなかには「とつぜん思い出したり」とか、「とつぜん忘れてたり」と、「とつぜん」が2回用いられている。これ以外にも、後藤明生の小説にはこの副詞が頻出する。

つぎに「狭い小さな世界」であるが、これは小説を読めばわかるように、後藤自身が送った朝鮮半島での生活と引き揚げなどの経験を指す。一口に、戦争体験と言ってもいい。年譜によれば、彼は1932年、旧朝鮮咸鏡南道永興郡永興邑に生まれ、13歳の時、終戦を迎え、翌1946年5月、福岡県甘木市に引き揚げた(「年譜——後藤明生^{ごとうめいせい}」、276)。この幼少期、少年期のころの記憶、そしてその後の思い、これが後藤の小説の契機となる。

こうした経験が、狭いか、広いかは、主観的な判断によるが、「狭い小さな」には、個人的な、という意味合いも含まれよう。というのも、戦争は誰もが経験するものではないし、まして、朝鮮半島で生活を送り、引き揚げの経験をもつ者はより少ないからである。また、

「狭い小さな」には、私的なという意味も含まれよう。というのは、個人が戦争を体験しても、その経験はそれぞれであり、まして、その後の個人の人生にどのような影響をあたえるかも人によって違うからである。経験の意味や記憶は私的なものとなる。それゆえに、「狭い小さな」とは多くの者と共有されないことを言うのだろう。

そして、「狭い小さな世界」とは後藤の小説の主人公が住む団地をも指すのではないかとされる。団地は後藤にとっての「方丈」(庵)と言える。

それでは、これから「とつぜん」という副詞、戦争体験、あるいは、団地という点をめぐり、後藤明生の独特な小説世界について考えてみたい。

3-2-1 「とつぜん」という副詞

ここでは、「とつぜん」という副詞が用いられている箇所をみて、なぜ、この語が多用されるかを考えてみよう。

「思い川」の主人公は、父の記憶をたどるために、朝鮮半島時代に一家で世話になった山田さんをとつぜん訪ねたいと思う——「しかしわたしが綾瀬川の土手を歩きながら、とつぜん山田さんを訪ねる旅を思い立ったのは、洋子さんのためではなかった。まことに平凡なことだが、山田さんを訪ねてみたいと思ったのは、いわば一つの川をその源に向かって歩いて行ってみたいような、そういう気持ちなのであった」(「思い川」、『思い川』207)。

これまで見向きもしなかった団地の近所を流れる川である綾瀬川に、朝鮮時代によく食べた土筆を取りに行くうちに通うようになる。そのうち、男は歴史を、記憶をさかのぼり始め、そして、とつぜん、朝鮮半島で暮らしていたころに世話になった山田さんを、現在の住所である鳥取に訪ねる旅を思い立つ。引用文中、「洋子さん」とは山田さん(山田醤油店)の娘の名である。

つぎに『書かれない報告』の表題作の書き出しである——「電話によるとつぜんの指名が男をおどろかせた。しかしおどろいたのは電話だったせいではない。もちろんなんの予告もなく、とつぜん男が指名されたからだ。相手は、県庁の社会教育課のものです、と名乗った。そのような部署に所属するものから、とつぜん電話で話しかけられるようなおぼえは、男にはなかった。男はR団地の一居住者に過ぎない。もちろんR団地はR県に所属している。したがって男はR県民だった。しかしただ、それだけの話だ。生れ故郷でもなければ、親兄弟が住んでいる土地でもない。たまたま抽籤に当たったため、流れ着いているだけだった。なにしろ男が住んでいるのは団地だからだ」(「書かれない報告」、7)。

ここでは「とつぜん」が3回使われる。名前も年齢もしめされない「男」という主人公に、ある日、とつぜん電話がかかってきて、彼がその住人である団地に関する報告書を依頼される。聞くと、報告書はすべての住民が書くのではなく、さまざまな団地(R県下の十数か所

ある大小さまざまな団地）から70人が選ばれ、男はその一人になったのだという。このように、後藤の小説は、予想もしていない不用意なことから始まる。

上の一節には、後藤明生の小説世界に欠かせない「団地」も出てくる。さきほど「漂着した」を引用したが、ここでは「流れ着いた」と、似たような表現が見られる。この表現は、団地に入居したのは、自分で入居を申し込みはしたものの、最終的には「たまたま抽籤に当たった」ことで入居できたという思いを表すためだろう。抽籤に当たることも、偶然であるし、とつぜんである。

付言すれば、主人公がただ「男」とだけ呼ばれ、名前が与えられない点、また、団地もただ「R団地」と表記され、「R県」、「R県民」をふくめ、具体的な地名が明記されていない点などは、現代社会の希薄な人間関係、人間の記号化などをしめしているだけではなく、団地住民の匿名性と関係しているのだろう。

そして、代表作『挟み撃ち』である。書き出しはこうである——「ある日のことである。わたしはとつぜん一羽の鳥を思い出した。しかし、鳥とはいっても早起き鳥のことだ。ジ・アーリィ・バード・キャッチズ・ア・ウォーム。早起き鳥は虫をつかまえる。早起きは三文の得」(3)。

この小説も、前触れもなく、とつぜん始まるのである。書き出しだけではない。読みはじめると、最初の20ページくらいで何度もこの副詞に出会う。「とつぜん『朝鮮北境警備の歌』が口をついて出てきたが、とにかく妻がわたしの外套に反対しなかったことは、幸いだった」(14)、「あの外套はいったいどこに消え失せたのだろうか？ いったい、いつわたしの目の前から姿を消したのだろうか？ このとつぜんの疑問が、その日わたしを早起きさせたのだった」(18)、「ともかくわたしは、ある日とつぜん早起きをした。このとつぜんの早起きについて、最早や何か説明を加える必要はないだろう。わたしに限らず、誰にでもこのようなある日は、あるはずだからである。ある日とつぜん何事かが起るのであり、それは必ずしもわたしたちの誰もが予定を立てていた通りの生活であるとは限らない」(21) などなどである。

「ある日とつぜん何ごとかが起る」、あるいは、何かをふと思い出し、何かをしたい衝動に駆られる。人はとつぜんのことに巻き込まれてしまう。それが後藤明生の小説世界である。そして、その思いつきは成就しない。「思い川」の場合は山田さんに会おうとするが、肝心の山田さんはすでに他界している。とはいえ、男は落胆もしない。山田さんに会うことが最終的な目的ではないからだろう。

いっぽう、『挟み撃ち』の場合は、やはり団地に住む男が、ある朝、とつぜん早起きをし、福岡から大学受験のため上京したときに身につけていた外套の行方をたどる。男は、ふと、大学入試に出題され解けなかった試験問題、「次の和文を英訳せよ。《早起きは三文の得》」(7)を思い出し、それに答えられなかったことを悔やむ。さらには、ゴーゴリの『外套』の

世界も男につきまとう。男は記憶や引用につきまといわれる。そして、肝心の外套であるが、結局、見つかることなく終わるのである。そもそも、すでに家庭をもち、別な外套をデパートで買い、着ている中年の男が、10代の後半に着ていた外套を探そうとする思いつきには無理があるのである。たとえ、流行のコートには目もくれずに外套という古風なスタイルのものにこだわり続けているにしても。

「ジ・アーリー・バード・キャッチズ・ア・ウォーム。早起き鳥は虫をつかまえる」と唱えつつも、早起きした男は外套という「虫」を「つかまえる」ことができない。大学受験の問題に答えられず、浪人したように、男の一日は早起きした甲斐がないまま終わる。

以上、「とつぜん」という副詞が用いられているさまざまな場面を見てきたが、なぜ、これほどに「とつぜん」が頻繁に用いられるのだろうか。後藤はとつぜんのことがいかに人生を決定するかを身に染みて知っているのではないか。彼が経験したなかで、もっとも忘れられないとつぜんのできごとは、日本の敗戦によって、日本の植民地であった朝鮮が独立したことであると思われる。数あるとつぜんのことの根底にとつぜんの敗戦があるようだ。

小説集『書かれない報告』の「無名氏の話——後記に代えて——」には「運命」ということばとともに、このとつぜんのできごとが語られる——「例えばわたしが生れ、かつて住んでいた朝鮮半島の北部のある場所をわたしの故郷であると呼ぶならば、わたしの故郷はすでに〈日本〉からは消滅している。その場所は、わたしが生れたときは〈日本〉であったにもかかわらず、わたしが中学一年生のとき、とつぜん〈外国〉となった。あるいはその場所は、もともと朝鮮であったものが、ふたたび朝鮮に還っただけだ、という考え方もある。しかしいずれにせよ、いまここでわたしは、民族的に語っているのではない。また、民族的な問題を、個人的な問題として語ろうとしているわけでもない。ここでわたしが語るのは、いわばわたしの〈運命〉の問題であって、戦争はわたしの〈運命〉とそのような形において結びついているということである」(204)。

ここで「〈運命〉」ということばを用い、また、「民族的に語っているのではない」とあえてことわっているのは、日本と朝鮮の関係において、敗戦を契機に宗主国と植民地の関係が消滅して朝鮮が独立したとか、ネーションの問題を意識したとか、そういうこと以上に、敗戦が自分の人生を決したとつぜんのできごとだったことを強調するためだろう。

「わたしが生れたときは〈日本〉であったにもかかわらず、わたしが中学一年生のとき、とつぜん〈外国〉となった」という不意打ち、これが、後藤明生の多用する「とつぜん」という副詞の源にあると思われる。しかも、それは国家や民族などのネーションの次元だけではなく、故郷の喪失に結びつくのである。かつて日本だった朝鮮が日本ではなくなり（日本から独立し）、北朝鮮となったあとも、彼が生まれ育った朝鮮半島は彼の故郷であり続ける。

後藤はとつぜん〈日本〉が〈外国〉となるのを目の当たりにした。敗戦によって「昨日の

植民地が今日の外国にとなった北朝鮮における日本人」（「一通の長い母親の手紙」、『書かれない報告』、174）となった。植民地が独立するということは、支配・被支配の関係が逆転することである。また、国旗が変わることである。その時代の「変り目」、国家の変り目に後藤は立ち会った。まさに運命的であった——「しかしながら、昭和二十年十一月以降において、北朝鮮ではどのような国旗を用いていたかは、調べてみればわかるはずだ。戦争が終わった直後に男が見た朝鮮の旗は、いま南朝鮮の国旗となっているものだった。日章旗の赤い丸の部分半分だけ黒く巴形に塗り分けて、白い部分の四隅に占いの算木のような模様を組み合わせて配した、大韓民国旗と同じものである。それが現在の人民共和国の旗に変わったのはいつからだろう？ この問いもまた、調べてみればすぐに解けるわけであるが、男にはわからなかった。あるいは当時は、小学校の国旗掲揚塔には、いかなる旗も掲げられてはいなかったのかも知れない。ちょうど変り目だったのだろうか？」（同上、166）

国旗は一つの記号である。また、図柄でもある。敗戦を機に、朝鮮半島は「〈日本〉」ではなくなり、日の丸とは違う旗を掲揚する。そして、日本人はそこにいられなくなり、脱出を余儀なくされる。

とつぜん、国が変わり、引き揚げを体験した後藤明生は日本に帰ったとは言わない。「到着した」という——「わたしは徒歩で三十八度線を越えた。山あり川あり田圃あり山賊ありの十日間だった。どこをどう歩いたのかぜんぜんわからない。にもかかわらずわたしは、他のいかなる国へでもなく、日本へ到着したのだった」（「無名氏の話——後記に代えて——」、192）。

日本に「到着した」後藤は、まずは一家の出身地である九州、筑前地方にもどり、それから、大学受験のために上京する。卒業後、就職し、家庭をもち、団地に「漂着」する。

3-2-2 「到着」と「漂着」

後藤明生は日本に「到着した」が、それは帰郷ではなかった。日本は祖国ではあったが、そこに故郷はなかった。自身、「かつて住んでいた朝鮮半島の北部のある場所をわたしの故郷であると呼ぶならば、わたしの故郷はすでに〈日本〉から消滅している」と述べているように、後藤にとって故郷は日本にはなく「〈日本〉」にあり、「〈日本〉」とは現在の北朝鮮だった。北朝鮮はかつて（「わたしが生まれたときは」）「〈日本〉」だったが、その後（「わたしが中学一年生のとき」）、「とつぜん〈外国〉」となり、それと同時に「〈日本〉」でなくなり、故郷も「〈外国〉」となったのであった。

とはいえ、後藤は「〈日本〉」で生まれ育ったので、日本語を話していた。しかし、その後、日本（具体的に言うと、福岡甘木市）に帰国すると、そこで話されている日本語に違和感をおぼえる。その日本語は九州の一方言であり、彼はその習得に励んだ——「帰国後のわたし

の急務は、まず筑前ことばの習得だった。すなわち「落ちた」は「落てた」であり、「そうだけど」は「そうばってん」となる。あたかも英会話訓練のように、わたしは中学から帰るとその修得に励んだ。それは苦痛とはいえなかった。自己にうち克つべき戦いではあったが、日本と結びつくためにその戦いは、極めて当然のものと信じて疑わなかったからだ。かつて結びついていたところの北朝鮮とは、すでにわたしは切り離されていた」（「無名氏の話——後記に代えて」、192）。

方言を習得して「日本と結びつく」というのは、かならずしも「日本に根づく」ということではないだろうが、言葉のうえで同化しようとする事だろう。しかし、方言習得は、部外者には難しかったようだ。『挟み撃ち』にはつぎのように書かれている——「「バッテン」「タイ」「ゲナ」はマスターできた。しかし「センセイ」を「シェンシェイ」、「ゼンゼン」を「ジェンジェン」と発音する筑前訛りだけは、習得できなかった。つまりわたしが習得することが出来たものは、「チクゼン」ことばに過ぎないのであって、決して「チクジェン」ことばではなかったわけだ」（187）。

「「チクゼン」ことば」は習得したが、「「チクジェン」ことば」は習得できなかったという思いは、言葉においては日本と結びつくことはできなかったということだろう。それでは、朝鮮では日本と結びついていただろうか。後藤をふくめた日本からの植民者およびその子孫たちは北朝鮮では日本語を話していたが、そもそも日本語が朝鮮の土地と結びついているわけではない。日本語は朝鮮の土着言語ではないからである。移入した言語である。しかし、朝鮮は「〈日本〉」だったゆえに、そこで話されていた日本語は日本に結びついていた。というより、「〈日本〉」もその日本語も、日本に属していた。

「〈日本〉」から切り離され、そのうえ到着した日本には根づくことができないという意識を後藤は抱き続ける。しかし、後年、団地の住民となることによって、この意識から多少は解放される。というのは、団地というのは根づく必要がない家であり、住民は匿名になれるからである。

団地とは「人間の家族が、他人として上下に積み重ねられて生活する」（「書かれない報告」、19）空間である——「二階にある男の住居は、それ自体が五階建ての鉄筋コンクリート建造物の内部において上下左右から挟まれていたが、挟まれているのは男の住居だけではなく五階建ての棟自体でもあったといえる。しかしながら同時にその棟は、それ自体を挟み撃ちにしている前後の棟を挟む役割から免れるわけにはゆかない。つまりそれぞれの棟は互いに挟まれ合っていた。また同時に挟み合っていた」（同上、101）。

さて、団地に「漂着した」後藤は、上京直後から団地に住んだわけではない。結婚し、家族をもつようになってから団地に何度も応募して、抽籤で当たったのである。『挟み撃ち』の

「男」は上京して20年という設定である。最初は蕨に住み、現在の草加に移ってやがて10年が経つ——「それにしても、生まれてはじめて九州筑前の田舎町から出てきたわたしが、最初に住みついたところが中山道沿いの蕨宿。そして二十年後のいま住んでいるところが日光街道沿いの草加宿、というのはいかなる因縁によるものだろうか？ もちろんわたしは、蕨から草加へ一直線に移動したわけではない。わたしが中山道から日光街道へ至る経路は、山手線以上に迂回している。草加宿はずれの田圃のど真中に、まるで蜃気楼のように出現したマンモス団地に住みはじめてやがて十年だった。いま十歳になる長男が生まれて暫くしてから、たまたま拙せんに当たったのである」（『挟み撃ち』、31）。

文中に「蕨から草加へ一直線に移動したわけではない」とあるように、男は蕨に10年住んで、その後草加に移り、10年近くが経過したのではない。現在の団地（草加）が実に15か所目であり、紆余曲折をたどる。男は外套の行方を求め、草加から蕨へ移動する最中、電車の中でこれまでの経歴を辿る。以下が男のメモの一部である——「●京浜東北線・蕨（S27・3～S28・5）——●赤羽線・板橋（S28・6～約一カ月。滝野川郵便局裏。二階）——●西武新宿線・鷲の宮（S28・7～約一カ月。麦畑の中を歩く）……」。これで三か所目、さらに12進んで、草加の松原団地に至る——「●東武線（地下鉄日比谷線）・現在の団地（S37・12～）——？」（同上、33）。

昭和37年12月から団地に住みはじめたある日、男はとつぜん、外套を思い出す。しかも、その外套は福岡から大学受験のために上京した際に、つまり20年前に着用していたものである。そして、前述のごとく、この小説の男の一日はこの外套をめぐってとつぜん始まる。そして最初に向った先が最初に住んだ蕨である——「とにかくいまは、あの外套である。カーキ色の旧陸軍歩兵用外套は、いったい、いつどこで消え失せてしまったのか？ このとつぜんの疑問のために、わたしは早起きしたのだった。そして、電車に乗ったのである。とにかく蕨だ」（35）。

「旧陸軍歩兵用外套」とあるように、外套は戦争の名残であり、朝鮮半島時代の名残である。その外套を着て上京した男は、作者後藤の分身だとすると、ロシア語科を受験する（伝記的には1952年東京外国語大学露語科を受験する）。それゆえ、外套はゴーゴリの『外套』を想起させる。実際、小説中の男もロシアの作家を意識し、外套の話題になると、その『外套』に言及し、作品から引用する。年譜によると、1952年は『外套』や『ネフスキー大通り』を読み、「ゴーゴリ病にかかった」（「年譜——^{ごとうめいせい}後藤明生」、276-77）とある。

外套は男の経験した戦争と朝鮮での生活の象徴であり、また、現在、作家である男の文学的志の象徴でもある——「わたしは、毎朝早起きをしているサラリーマンではなかった。毎晩毎晩、あたかも団地の不寝番でもあるかのように、五階建ての団地の3DKの片隅で、夜通し仕事机にへばりついている人間である。もちろん誰かに不寝番を頼まれたわけではな

い。自分で勝手にそうしているわけだ。わたしはゴーゴリの『外套』を翻訳中の露文和訳者でもない。しかし、あのカーキ色の旧陸軍歩兵の外套を着て、九州筑前の田舎町から東京へ出て来て以来ずっと二十年の間、外套、外套、外套と考え続けてきた人間だった。たとえ真似であっても構わない。何としてでも、わたしの『外套』を書きたいものだと、考え続けて来た人間だった」(20)。

後藤明生の「狭い小さな世界」というのがだんだんと明らかになってくる。郊外の団地から都心の会社に電車を通うわけではなく、3DKの団地に籠り、小説を書いているという日常、そのなかでとつぜん故郷を思い出し、行動に駆られる。そのうち忘れ、また思い出し、それに動かされ、夜になってはベンを走らせているのだ。そして、現在執筆中の『挟み撃ち』こそ、男にとって「わたしの『外套』」なのである。

後藤の分身である「男」は団地に籠る。団地という「狭い小さな世界」で、自身の日常という「狭い小さな世界」を小説に変換する。そのうち「男」は団地と一体化してしまう。「書かれない報告」にはつぎのような一節がある——「はっきりしていることは、唯一つだった。住居はすでに男の一部だ。同時にもちろん、男は住居の一部でもある以上、一日たりとも住居を離れて自分を考えることなどできないはずだ。そのようにして男は、日夜、住居とともに生活していた。そしてその住居が傷つきはじめていま、どうして男だけが傷つかないまま生きていられようか。なにしろ男は、そのような形において住居と結びついていたからだ」(「書かれない報告」、60)。

後藤は敗戦を機に「〈日本〉」でなくなった朝鮮半島から「切り離され」、引き揚げる。その後、日本に「到着」し、「日本と結びつくために」、「チクジェン」ことば」を身につけようとする。高校卒業後、「旧陸軍歩兵用外套」を着て上京し、大学を受験する。その後、卒業し、就職し、結婚し、子を設け、その間、蕨を皮切りに転々とし、15か所目に草加の団地に「漂着」する。その挙句、団地が自身の「一部」であることに気づく。

3-3 綾瀬川と龍興江

しかし、日常はこわれる。団地も匿名性を脱するときがある。後藤明生流に言うと、現在の日常と朝鮮での生活が結びつく場合がある。

その兆しというか、その一瞬は小説集『書かれない報告』収録の「結びつかぬもの」に見られる。この小説は、タイトルが示すごとく、結びつかない両者について書かれている。

たとえば、こんなエピソードがある。団地住まいの「男」と呼ばれる主人公が、群馬県の横川方面に列車で行く際、予約した電車の席「〈10-C〉」を勝手に窓際の席と考え、その窓際の席に行ってみるとすでに人が座っている。「〈10-C〉」は「通路側」で「AISLE」(この英単語の意味を男は知らない)であり、「WINDOW」ではなかったと男は気づくのである。

しかし、切符には「〈10-C〉〈内側〉」とあり、男はなぜ「〈内側〉」が「窓際」ではないのか、窓際の席こそ「〈外側〉」ではないのかと自問する——「男はなおも通路を見続けた。果たしてこの通路なしに、窓際の乗客は列車の外側へ出ることができるだろうか？そしてその通路側には男が着席している以上、窓際の乗客にとって男はその外側にいなければならないはずだ。つまり男が着席している〈10-C〉〈内側〉と名づけられた座席は、窓際の乗客の外側だった」（「結びつかぬもの」、111）。

このように「〈内側〉」と「窓際」は結びつかない。しかし、結びつかない両者は、けっして離れているのではない。むしろ隣り合わせの関係、また、見方によっては変換可能な関係にある。「内側」と「外側」の両者のように。「〈日本〉」と「〈外国〉」のように。きわめて後藤明生的な両者である。

この小説には結びついた例もみられる。とはいえ、それも男のなかだけで結びつくのであり、最終的には「〈内側〉」と「窓際」の場合と似た例になるかもしれない。それは蛇を殺した話である。つまり、「男」が朝鮮で蛇を殺したことと、田圃の真ん中に出現した団地の周辺にある「〈稲作調整実施田〉」から這い上がってきた蛇を殺したことが、蛇を殺したという点で結びつく——「男は枯枝の股に二匹の死骸をぶらさげたまま、どのくらい田圃道を歩いただろう？はじめ男はその死骸をぶらさげたまま自宅へ帰りたいと考えたようだ。男は満足だった。団地の子供たちはまちがいなく男のまわりに群がってくるだろう」（103）。

男は意気揚々として、昔、朝鮮で蛇を殺したとき、仲間から英雄扱いされた自分を思い出し、それと同様、団地の子供たちに囲まれる自分を想像する。しかし、実際は、男は団地の中には入らず、団地の子供たちも集まってこない。それでも、高揚感は去らない。男のなかで朝鮮の頃の自分と現在の自分が結びつくからである——「しかしながらそのために男の満足の度合いが薄れたとはいえない。男が出会ったのは日本で初めての蛇だった。日本へ帰国した男が二十五年目に初めて一対一で向い合った日本の蛇である。したがって男がおぼえた満足は、北朝鮮の蛇を殺した男と、現在の日本で生きている男とが、日本の蛇を殺すことによってはじめて結びついたための満足であったと考えられる」（103）。

男はその話を「蛇に詳しい知人」にするのであるが、知人は「ぼくの蛇と君の蛇は、どうやら結びつかないようだな」（103）と言われ、これもまた「結びつかないもの」として扱われる。

さて、三木卓の「朝」の一節を挙げて、三木のなかに潜む「永遠の少年」について述べた。三木にとって中国での生活と敗戦後の引き揚げは人生の原点ともいうべきものであり、老いでもその少年が自身の中に居続ける。その少年の眼で三木は小説を書き続ける。あるいはその少年を回顧する。

その「永遠の少年」は後藤の中にもいて、その少年を自分の息子の中に見出すことで、後藤は朝鮮の頃の自分と現在の自分との接点を見出すのである。二つの自分が和解すると言ってもいい。

これまで見向きもしなかった団地のそばを流れる綾瀬川に、朝鮮で食していた土筆が生えているということをきっかけに通うようになり、ついには、川の源までたどろうとしている場面が「思い川」の最後に描かれる。男は一家で川の上流に向かう。そして、息子のなかに自分自身を見るのである

「お父さん、本当に遡っちゃう気なの？」

「あ？」

「何だ、お父さん、自分でいって忘れちゃったの？」

「何を？」

そうやってわたしは、あと思った。長男の顔の雀斑が目に入った。小鼻の両脇から頬骨のあたりに、小さな茶褐色の斑点がひろがっている。もちろんおどろいたのは、雀斑そのものにではなかった。つい先程も、そば屋で眺めたばかりだった。ただわたしはそのとき、綾瀬川の土手の上で三十年前の鏡をのぞいたような気がしたのである。わたしはこんな顔をして元山中学の寄宿舎から山田醤油店へ歩いて行ったのだろうか。おそらくそういうことなのだろう。たぶんこの顔で、戦闘帽まがいの制帽をかぶり、ゲートルを巻いて、平元道路を往復したに違いなかった。龍興江へ向う土手に沿った煙草倉庫の日本人収容所へ入れられたに違いなかった。先の割れていない地下足袋をはいて、花山里の凍った川の橋を渡り、真暗い雪野原を元山に向って歩いて行ったのも、この顔だった。ソ連用の軍用トラックが疾駆する元山里を歩いたのも、レーニン、スターリン、金日成の巨大な肖像を掲げた赤軍アーチの下をくぐったのも、すべてこの雀斑の顔だったのである。(256-57)

男は息子に30年前の自分を見出し、さらに川をさかのぼっていく。川幅は狭まり、ニセススキの群生が見え、そのとき、またしても、とつぜん、男は朝鮮の龍興江を思い出すのである。このとき、綾瀬川は龍興江となる——「義勇奉公^{ぎゆうほうこう}四つの文字／胸に刻みて鞭を上ぐ／丈夫^{ますらお}中村震太郎／行手は昏し興安嶺^{くら こうあんれい}／／とつぜんわたしの口から一つの古い歌が出て来た。龍興江の土手を散歩するとき、父はこの軍歌をしばしば唸った。この軍歌もふつうの軍歌レコードには入っていない。しかしわたしは二番までを丸暗記していた」(260)。

男は綾瀬川をさかのぼり、ニセススキに囲まれ、父と歩いた龍興江の土手の柳をとつぜん思い出す。しかし、このときはなんの脈絡もなく思い出したのではなく、川を上り、さらに、息子に昔の自分を見出したことで朝鮮での生活、そして、父を思い出したのである。

父を亡くした後藤は、敗戦とともに、とつぜん「〈日本〉」から切り離され、三十八度線を越えて日本に「到着」し、その後、団地に「漂着」する。戦後の高度経済成長期の中で出現したマンモス団地に住み、土筆をきっかけにして団地のそばを流れる川に通い（これもとつぜんのことだ）、その綾瀬川をさかのぼり、龍興江の面影を見るのである。息子の中に自分を見出し、日本の中に「〈日本〉」を見出す。いわば故郷を見出すのである。

最後に『思い川』収録の「父への手紙」の一節を挙げる——「お父さん、いま日本では朝鮮および朝鮮人の問題がいろいろと論議されています。日本帝国主義が朝鮮および朝鮮人に対して犯した「罪」についてです。確かにわたしは、日本人であるという理由によって、二十七年後のいまもなお、「生まれ故郷」から拒まれているのかも知れません。しかし、「生まれ故郷」についてのわたしの記憶だけは、誰も拒むことはできないはずです。この問題について、お父さんの意見を聞くことができないのが、まことに残念です」(52)。

引用・参考文献

- 三木卓『砲撃のあとで』集英社、1973年。
 三木卓『私の方丈記【現代語訳付】』河出文庫、2016年。
 後藤明生『書かれない報告』河出書房新社、1971年。
 後藤明生『挟み撃ち』河出書房新社、1973年。
 「年譜——後藤明生^{ごとうめいせい}」、後藤明生『挟み撃ち』講談社文芸文庫、1998年。
 後藤明生『思い川』講談社、1975年。

本研究は青山学院大学経営学部経営学会から研究助成を受けた。記して感謝する。